



うきは市人物名鑑①

菊竹六鼓

Rokko Kikutake



菊竹六鼓記念館

氏の功績を称え、遺品や記録を
後世に伝えるために建てられた
記念館で、記者時代に愛用していた
机や原稿等が展示されています。
所在 / うきは市吉井町 1082-1
入館 / 無料 (見学は要予約)
問い合わせ / うきは市教育委員会

0943-75-3343

発行 / 地域おこし協力隊

激動の二十世紀に不屈の意志を貫いた

新聞記者・菊竹六鼓

菊竹六鼓(本名淳)は、一八八〇(明治一三)年に生葉郡延寿寺(現…うきは市吉井町延寿寺)の旧家に生まれました。二歳のとき、左足の傷が原因で骨髄炎を引き起こし手術を受けましたが完治せず、生還歩行が困難な身となりました。

淳は二男五女の末っ子で、年長の兄・博之とは二十二歳離れていました。自由民権運動に熱心に取り組む兄の姿を日常的に見ていた淳は、少なからず影響を受けていたといえるでしょう。



淳は幼いころから非凡な才能を発揮し、明善中学校(現…明善高等学校)在学中に投稿した短歌は入賞、校内雑誌「婦女会雑誌」でも編集と発行を任されるなど、早くから言論人としての文字を注目されてきました。

また非常に頭も良く、官学(大学)への進学を目指していましたが、時を同じくして実家の経済状況が悪化し、学費の高い官学へ行くことは叶いませんでした。しかし、同時に開いた大隈實業創設の私学、東京専門学校(現…早稲田大学)への進学はあきらめきれず、明善中学校の支援もあり、淳は同校に入学しました。

東京専門学校でも優秀な成績を修め卒業すると、帰郷して福岡日日新聞(現…西日本新聞)へ入社します。



上/福岡日日新聞時代
右/後列左に立つ
明治27年4月
淳・14歳頃



上/下から2段目中央・明善中学校時代の淳

淳が生きた頃の日本

当時は文明開化から間もない頃で、日本は諸外国と対等な関係を築くことを目指し、特に西洋の発達した文化や政治体制を盛んに取り入れていました。

また、世界中が自国の力を見せつけるべく、日清戦争(一八九四年)、日露戦争(一九〇四年)、第一次世界大戦(一九一四年)と各所で大きな戦争が相次いで起こりました。

度重なる戦争を通して人々の中では、国民が主体となって社会を動かしていく考え方が広まり、活動も活発に行われていきました(大正アモクラシー)。筆名の菊竹六鼓を用いるようになった頃、アメリカを露端とする世界的な大不況が日本を襲いました。多くの国民が貧困にあえぐ日々を過ごし、その貧しさから、地方では数多くの女性が身を売られて公娼や娼妓となりました。六鼓は公娼廃止と女性の権利を世間に訴え、自由と人権への信念を持ち続けました。

しかしながら人々は、当時の政治に対し目を増すことに限界を感じていき、革新的な意見を唱える軍部に賛成する声次第に増えていきました。

今なお語り継がれる六鼓の姿

◆理想的な死について

六鼓の名が一躍有名になったのは、一九〇五（明治三八）年に福岡市郊外で起きた踏切事件がきっかけでした。

鉄道の踏切信号手の娘・山崎お栄（当時十一歳）が、両親不在のため、代わりに四つのお信号を守っていたとき、汽車の接近に気付かず渡るうとする歩行者を見つけました。お栄は、小さな体で夢中になって注意を促すうちに、歩行者の身代わりに亡くなってしまいました。

当時は日露戦争の最中であり、世論は戦争に注目していましたが、六鼓はあえて無名の少女の死を取りあげ、論説「理想の死」を記しました。同論にて少女の死を悼むとともに、人間の理想的な死について、「その本務に斃れ、職務に殉ずるもの」であると説き、自身の人生のあり方についても覚悟を示しました。

◆五・一五事件

一九三二（昭和七）年、国の風潮が確実に戦争へと向かう中、国際協調を守るうとした当時の首相・犬養毅を、反発していた陸・海軍の軍人が暗殺するという事件が起きました（五・一五事件）。

明白なテロ行為でしたが、多くの新聞社は報復を恐れ、記事にすることを避けました。その中で唯一、六鼓だけが軍部の責任を問いつけました。

事件の翌日、夕刊の論説にて「首相凶手に斃る」を発表し、以降本編にわたって集中的に軍部の行動を戒め、民主主義のあり方を示しました。当時の状況下では極めて異例の出来事でした。この頃の久留米市には、革新派の陸軍軍人が多く駐在しており、「福岡日日」の本社、久留米支社ともに脅迫と抗議が相次いで起こりましたが、六鼓と新聞社の面々は屈することなく立ち向かい、その姿勢は今もなお多くの人々の中で語り継がれています。

◆晩年の六鼓

晩年の六鼓は、結核にかかり入院と自宅療養を繰り返しました。一九三七（昭和十二）年七月二十一日、息を引き取る前に新聞社の面々を招き、新聞社の将来について遺志を告げると、家族に看取られながら享年五十七歳でその生涯を終えました。

報道において信念を貫き通した六鼓の姿は世界でも高く評価され、『二〇世紀の報道人二〇〇人』（世界新聞協会WAN）に選ばれました。

参考資料／『記者ありき 六鼓・菊竹淳の生涯』木村栄文（朝日新聞社）、『旅二味』『ひと紀行菊竹六鼓』（JRR九州）、『浮城六鼓』（うきは市教育委員会）

菊竹家の日常



【家族・知人が語るろっこさん】

長男が生まれた時、私の好物のマシマロを2袋も買ってきてくれました。

妻 静子

柔道をやっていましたが、試合を見に来た父が激しい試合の様子にいたくショックを受けたようで辞めるよう言われました。

父がはじめろ、と言ったのに(笑)

長男 貞吉

父が遊郭業者とたたかった時、色んな方が家に大勢やってきて大声で喚いていたのですが、父は面倒な時には居留守を使い、母が対応していました(笑) 母は脅迫者を黙ったまま能面のような顔で見っていました。もちろん、父が対応することもありましたが…

菊竹家子ども一同

菊竹さんはいつも大会挨拶で「日本女性はコスモスの花のごとく…」と言っていました。よほどコスモスが好きなんでしょうね。「菊竹さんのコスモス演説」は好評でしたよ。

女子四大競技大会 関係者

六鼓ぼんぼん新聞

品質
月岡古墳
本位

敢て我が妻の覚悟を促す

頻々たる我が妻の連続として、我が妻が、ついに愛人のために一筋の涙を流したことは、わたし淳が、淳個人と共に真に悲憤痛恨に堪えざるところである。論説のパロディはここまでにして、ここからは「ろっこさん」の人間臭い一面を「うらろっこ」としてご紹介。六鼓と言えば「古武士」「反骨のジャーナリスト」「気骨の新聞人」等例えればキリがないほど芯の通った人間像が

浮かんできると、彼の手記は、愛人への断ち切れない思いを末練たつぷりに記してみたり、不具の野良猫を自分に例え自己嫌悪に陥ってみたり、と非常に繊細で感受性豊かな一面が痛いほど伝わってくるものである。

妻・静子について

静子と淳は、明治時代には珍しい恋愛結婚であった。静子は看護婦であり、淳が左脚の再手術のために通った九州帝國大学付属病院が出会いと

考えられる。両親を早くに亡くした静子は叔父に育てられ、自活するため看護婦という道を選んだ。当時新聞記者の評判は非常に悪く、叔父は淳との結婚に反対するが、そこは淳と結婚する女性。叔父の反対で結婚への意志を逆にしつかりと固め、結婚へ至る。結婚後、情に篤く清貧をよしとする淳は金の無心があれば快く貸付け、静子は質屋通いの日々。「あのひとのマチガイなら、あきらめます」といつて夫の不倫を赦したこともあったそう。しかし、三歩下がった貞淑な妻、と

いった一面だけでなく、淳が左遷され弱っている時は、「私が養う」と淳に言ったエピソード等、肝の座った一面もある賢く強い女性だった。仕事では「古武士」な六鼓も家庭では繊細で感受性豊かな女性的な一面を出すことができたのではないだろうか。

六鼓は子煩悩

六鼓は子煩悩であり、長男が東京の大学を希望した時も地元を勧め、長女結婚の際は、家の柱が一本無くなった、と度々嘆き、また、末娘が小学校に入学すれば、登校する娘の姿が見えなくなるまで門前で見送る等、微笑ましいエピソードが残っている。気骨の人も子どもには骨抜きだった。